

## 酪農経営と故郷の復興をめざして

宮城県農業高等学校 農業園芸科 3年 櫻井 栄司

私の家は宮城県南西部、蔵王連峰の南に位置する七ヶ宿町にあります。親子三代にわたって酪農を営み、私も幼い頃より酪農に関わってきました。経営規模は現在ホルスタイン種を総頭数80頭をフリーストール方式で飼育しており、今後さらに飼育頭数を増やし規模を拡大していく予定であります。

私には年の離れた姉と兄がおり、同じく2人とも家業に携わっています。姉と兄がいることもあって、親からは「酪農ではなく、自分が他に興味がある仕事をしなさい」と家族からはよく話をされました。しかし、幼い頃から牛を見て育ち、物心つく頃には家業に興味を抱いていました。小学生になる頃には、「父やみんなと共に牛を育てて行きたい」と強く思い、その気持ちは時間が経っても揺れ動くこともなく、進路も自ずと酪農を学ぶことができる宮城県農業高等学校への進学を決意しました。実際のところ、この進学については家族に反対されましたが、話し合いを重ね、自分の気持ちを伝え、私の気持ちを理解してくれ、心から応援してくれるようになりました。

これまで家での作業が中心だった私にとって、宮城県農業高校での学校生活はとても新鮮でした。広大な草地や飼料畑、様々な農業実習施設が充実し、恵まれた環境で学習でき、充実した日々を過ごせました。この環境で3年間しっかりと学習し、多くの知識や技術を身につけ、将来の夢へのステップにしていきたいと思いました。

しかし、その充実した日々や私の思いを一瞬で奪う出来事が起きたのです。東日本大震災が発生し、私達の学校を大津波が襲いました。

宮城県農業高校は仙台市の南に位置する名取市の沿岸部にありましたので、津波の影響を大きく受けてしまいました。津波は校舎の2階部分まで押し寄せ、実習施設や農場が流されてしまいました。幸い、学校にいた職員・生徒199人は校舎の屋上に避難して全員助かりましたが、私達が管理していた鶏や豚は全滅しました。

奇跡的にも生き残ったのは乳牛だけでしたが、その数は37頭中14頭だけでした。震災時私はまだ1年生で被災した校舎に登校したのも1年ほどでしたが、多くの思い出や忘れられない経験が詰まった校舎など私が知っている「宮農」がすべて無くなっていました。変わり果てた様子を見て、言葉では表現できない感情や気持ちが心の底から湧き上がりました。

私の住まいのある七ヶ宿町でも震災の大きな影響があり、約2週間の停電となりました。でも牛は搾乳を待っています。発電機を借り、バケットミルクカーを使い家族総出で搾乳を続けました。しかしバルククーラーを作動させるまでの電力が確保できないのと、集乳・加工

---

施設も被災して稼働していませんでしたので、搾った牛乳は全て捨てるしかありませんでした。流れていく牛乳を見ている父の顔は悲しさと悔しさが入り交じったような表情を浮かべており、その顔は今でも忘れられません。

父の気持ちを含め、この震災を機に私自身多く感じた事があり、今までには無かった体験もしました。そしてその体験などを通し今間違いなく言えることは、酪農への思いが更に強くなったこと、自分の力で我が家、そして宮城の酪農を支えて行きたいという気持ちが湧き上がってきたのです。

この思いから私には酪農での2つの夢ができました。1つめは酪農を通して沿岸部の復興を手助けすること、2つめは我が家の牧場の経営を加工・販売まで独自で行うことです。

1つめの酪農を通して沿岸部の復興を支援の方法として沿岸部の産業の復活があります。

私は以前の学校や周辺の田園風景がとても好きでした。緑豊かでとても心が休まる光景でした。しかしその豊かな土地は現在塩害により、作物を育てることが難しくなっているという事でした。現在は比較的塩害に強い綿花などの栽培や、除塩などのボランティア活動がされています。私もこれらの活動に参加し、活動を続けていく内に私の酪農経営に活かすことができるのではないかと考えました。それは沿岸部で飼料作物の栽培し、新たな産業としつつ、緑の大地を復活させるということです。

七ヶ宿町は福島県との県境にあり、現在大きな問題を抱えています。原発事故での放射能問題にさらされ、自給飼料での給与が規制対象となりました。現在は補助がなくては経営もままならない状況です。そこで、この状況を打破するため、現在放射能の影響の報告が少ない名取市沿岸での飼料を生産してはどうかと考えました。それは我が家の経営のためだけではなく、名取市沿岸部での産業の復活という意味でも実現したいと思っています。そのために塩害に強い飼料作物の研究や栽培方法の検討などが必要となりますが、それは今後の自分への課題として取り組んでいきたいと思っています。

2つめの夢ですが我が家の酪農経営を生産、加工、販売まで行う経営スタイルに変えて行きたいと考えています。我が家は現在生産のみで生計を立てています。もちろん、しっかりと日々の管理をしていけば利益は十分にあがると思います。しかし、生産調整や飼料価格の高騰など、現在の酪農を取り巻く環境を考えると生産だけでは不安があるのも事実です。そこで我が家の経営に加工と販売も取り入れ、付加価値をつけ、より広く販売・流通させて行ければと考えました。この経営方法では家族をそれぞれ部門担当制にしたいと考えています。将来的には兄や姉が生産部門、私が加工・販売部門を担当し、我が家オリジナルのブランドとして流通させていければと思っています。そしてこの経営方法にこだわるもう1つの理由としては、震災後の乳製品が不足したという経験もありました。震災後物資の流通がストップし、特に乳製品が県民の方々に十分に行き渡らないという事態になりました。

---

これから立ち直ろうとする人々が十分な栄養が摂取できないのはとても不幸なことであると思います。酪農家として今後、このような事態に対応するためには自ら乳製品をつくり、必要としている方々にいち早く届けることが復興に向けての手助けとなると考えます。私自身はこれから高品質な製品作り、さらにそれを安定して提供するための知識を大学に進学して身につけたいと思います。

宮城は多くの県、そして海外などから支援をいただいています。多くの皆様の温かい気持ちに私も県民の一人としてとても感謝しています。しかし、いつまでも支援に頼ってばかりはいけないと思うのも事実です。私達はこの震災で多くのものを失いましたが、それ以上に逆境を乗り越える強い気持ちや知恵を身につける事が出来たと思います。その中で自分ができることは酪農で宮城県を支えることです。放射能問題も含めクリアしなければならない問題は未だ数多くあります。しかしいつまでも嘆いているばかりでは酪農の発展、復興を果たすことはできません。まだまだ未熟な私ですが、様々な逆境に打ち勝つ本物の力を身につけ必ずや復興を果たしたいと思います。

---